

II 檀国大学，韓国企業の訪問記

韓国企業調査旅行の印象記

玉垣良典

欧米諸国には何度か出かけたのに、アジア近隣諸国を訪ねたのは私にとって今回の韓国旅行が最初の訪問となった。最初の予定では、檀国大学訪問と企業見学についても、それぞれ別項目をたてて感想を述べるはずであったが、ヨーロッパへの旅立ちを目前に控えて時間の余裕もなくなったので、ここではそれらの印象をも適宜織り込みながら、初めてのアジアの隣国訪問の見聞のうち特に印象に残った三点に絞って感想を述べることにしたい。

まず第一に、この国が今だに冷戦を引きずった南北分断国家であり、軍事的対決の緊張からいまだ十分には解放されるに至っていない国だということを、身をもって感じたことである。それはソウル空港から檀国大学に向かう途中ソウル市内に入る直前に午後二時になったところで、十分間戒厳令状態となり、外出禁止、自動車も全部停止となる。これが今も毎日繰り返されている。確認を逸したが、おそらく38度線に近い首都ソウルに限定してのことだと思われるが、文民大統領が登場した現在も軍事的引き締めを怠らない現状に入国早々にぶつかったわけだ。これは聞いていた話であるが、ソウルと釜山を結ぶ韓国の大動脈にあたる高速道路は、ソウルと釜山の郊外では直線で中央分離帯が無い。これは有時の際臨時の滑走路として使用することを考えてつくられたものだという。もっともソウル近郊では一部にコンクリート・ブロックで分離帯をつくってあるところも見られたが、これも恒久的なものではなく、いつでも撤去可能のものだ。釜山近くには高速道路脇に軍隊の集結場所らしく厚いコンクリートの壁で守られた施設も見受けられた。

これは現代自動車の工場見学のとき構内バスの車内でのことであるが、工場さし向けのガイドに、経営の現況—とくに企業収益—について聞きだそうと思って「今一番企業にとって気にかかることは何か」と尋ねたときの彼の即座のきっぱりとした返答である。われわれとしては日本の自動車不況が念頭にあり、株価の状態などを聞くつもりで口を切ったのだった。「それは核不拡散条約脱退後の北の出方です。経営トップの人は朝目を覚ますとまずラジオのニュースに飛びつく毎日です」というのが彼の返答である。朝鮮戦争の体験と南北対峙の緊張は対岸に身を置くわれわれの想像を超えたものがあるであろう。

第二には、韓国は今モータリゼーションの最盛期にあり、また住宅建設ラッシュのただなかにあるという印象をつよく受けた。これはバブル崩壊後のわが国と比較するから余計に強

く印象づけられたのかも知れない。大ざっぱな感じでは、韓国のモータリゼーションは、わが国の1970年代初め頃の段階にあるようで、自動車メーカーの鼻息は荒い。現在韓国では三系列のメーカーがあるが、三星電子グループがベンツと提携して新たに参入を計画中という。走っているのはほとんど国産車で外車はめったにお目にかかれない。この点ではわが国の産業政策を模範的に踏襲しているようだ。

住宅建設は前政権の盧政権時代から選挙公約として80年代後半から精力的にすすめられているが、人口の大都市集中の波は、衰えを見せず、建築、とくに民間住宅建設ラッシュは持続していると見受けた。この都市化という現代世界共通の運動は、次に述べる歴史的背景からみて韓国ではより強められて現れているように思える。

最後に印象的なことは、人口のソウル一極集中の勢いについてである。総人口約4400万人のうちソウルの現在の人口1300万人とすると、約30%が首都に集中していることになる。第二の大都会釜山の人口4,5百万人とすると、二大都市だけで全人口の四割を集中している計算になる。これは東京一極集中どころの話ではない——ひとつの巨大都市として見ればその絶対的規模として異常に大きいとは言えないかも知れないが、ソウル五輪をテレビで見たときの印象では、日本の都市計画、土地政策を反面教師として、韓国はかなり成功的に都市建設を進めているというふうに見受けられたし、またそのような報道にも接したが、今回実際に見てからの印象はかなり修正を必要とすると感じた。大都市の交通渋滞は日常化しつつあるようで、われわれの工場見学も渋滞を見越して、一時間の余裕をみて出発するようガイドに促された（幸い大渋滞には巻き込まれずにすんだが）。

帰国してこのソウルへの異常ともいえる集中の原因をあれこれ考えているうちに、これには韓国独自の歴史的背景があるという点について佐藤誠三郎氏の論文*が一つのヒントを与えてくれた。これは李朝朝鮮と徳川日本の欧米の開国要求にたいする対照的な反応について論じたものであるが、李朝朝鮮の統治機構の特色として、中国とほぼ同様の科挙試験によって選抜された文官優位の官僚——両班の身分より選ばれ「官僚機構の上級ポストは、軍事機構も含めて、科挙に合格した文人官僚(文班)によって独占されて」(同60ページ)いた——が統治したが、彼らは地方に派遣されても「短期間で交替し、身分が不安定な監司や守令は、任地の発展よりは、蓄財や中央政局の動向に関心を集中させやすかった。また朱子学を信奉していたかれらは、商工業活動にたいしては、一般に強い敵意を持っていた」(同66ページ)。これは自藩内の経済発展に深い利害関心をもっていた徳川日本の藩家臣とはかなり対照的なエートスである。いきおい地方には知的経済的指導層が育たず中央集中の文化という傾向を生む結果となったと思われる。こうなると、ことは近世における両国文明化の特性と差

異というだけではすまず、韓国には固有の封建時代があったのか、近代化における幕藩体制の功罪如何という問題にまでつながっていく。それはさておき、このような歴史的文化的背景に照らしてみれば、韓国の若者達にとってソウルの文化的吸引力は東京の比ではないということになるのではあるまいか。こうして一極集中がさらに進み、モータリゼーションが行き着くところまで進んだときに、自動車輸送の効率というものは果たしてどうなるであろうか。東京の住み心地の変化を思い返すとき、これは他人事とは思えない気がした。

* * *

檀国大学を訪問して感じたことであるが、校舎の建物の結構にはなかなかの品質感があり、相当に金をかけている——わが専修大学と比較して——と思われた。私はキャンパスの全体を見学する機会がなかったが、会食の折りに聞いた副学長で研究担当の金裕赫教授のお話では、同大学の図書館の設備はソウル（ということは韓国—ということになるろう）だと誇らしげに語っておられた。同大学に限らずソウルの大学は見たところ——といっても今回実際に見学したわけではなく折りに触れてテレビでみる印象をもとにしていうのであるが——どれも建物ががっしりしていて、高等教育にかける韓国の熱意が伝わってくるようだ。それはまた高等教育に限らず、初等中等教育施設に関しても、沿道で散見する限り、なかなかしっかりと造られていて総じて教育立国への情熱——わか国では明治期に見られた如き、そして現代日本ではどこかに行ってしまったものだが——を感じさせる。浦項製鉄所の正門の上に掲げられていた「資源有限、創意無限」というスローガンにも、知的資源開発への意欲が示されていると思えた。

最後の最後に、これは檀国大学で最初に報告された黄明水教授が指摘されたことで印象的だったことであるが、現在韓国でも若者の間にわが国の3 K 忌避と同じ3 D (Dirty, Difficult, Dangerous) 忌避の空気が広がっていて、製造業に人が集まりにくく、金融サービス業部門に人があふれるという、先進国一般に現れている問題が識者の間で懸念されているということである。発展の逞しいエネルギーとそれ故にまた急激な変貌の渦中にあり、わが国とも共通する難しい課題に当面している韓国経済の現状の一端に触れて有意義な調査見学の旅だったと思う。

* 佐藤誠三郎「近代化への分岐—李朝朝鮮と徳川日本」同「死の飛躍」を越えて—西洋の衝撃と日本」
（都市出版、1992）所収（第二章）